

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：32627

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02519

研究課題名(和文) オバマの広島演説にみる「終わりなき物語」に着想を得た「汚染の言説」の研究

研究課題名(英文) A Study of Toxic Discourse hinted by the Mythification of Narratives in Obama's Hiroshima Speech

研究代表者

岩政 伸治 (Iwamasa, Shinji)

白百合女子大学・文学部・教授

研究者番号：90349142

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：被爆者がこの世を去った後もその記憶が「終わりなき物語」を創造し、次世代に語り継がれるとするオバマ氏の広島スピーチに着想を得た本研究は、総じて原爆文学や詩、マンガなどに見られる被爆(汚染)の言説の分析を通して、「汚染の言説」が「除汚の言説」として機能する可能性を見出した。またエコフェミニスト、Terry Tempest Williamsのエッセイに見られる修辭的戦略を手掛かりに、彼女が提示する「歴史の再演」という行為を、歴史教育上有効な手段とされる「歴史的再現」の修辭的戦略として位置付けることに一定の成果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究の学術的意義は、環境汚染に関するナラティブの重要性を明らかにすることであり、またその社会的意義は、環境保護意識を高め、問題解決に向けた行動を促す役割を果たすことにある。そのために「科学論文」ではなく、環境汚染の実態をナラティブによって記述する「汚染の言説」として影響力を持つウィリアムスの作品を分析し、オバマの「核なき世界」という地球レベルの環境保護を目指す修辭的戦略と同時代性を持つウィリアムスのナラティブが、市民レベル、地域レベルで汚染の問題を意識するためのディスコースとして、オバマの言葉を補完する役割を果たし、意義を持つことを明示した。

研究成果の概要(英文)：Inspired by Obama's Hiroshima speech, in which he asserted that even after Hibakusha have passed away, their memories will create "endless stories" that will be passed on to future generations, this study has generally explored the nature of this possibility through an analysis of the discourse of radiation exposure as contamination in A-bomb literature, poetry, manga, and other forms.

研究分野：環境人文学

キーワード：環境人文学 エコクリティシズム 汚染の言説 核なき世界 歴史的再現 環境批評

## 1. 研究開始当初の背景

文学作品のディスコース分析において批評家ローレンス・ビュエル (Laurence Buell) は、人間が主体的に構築したディスコース体系に対して、ディスコースを構築する「場所」としての環境に着目し、そこから導かれる想像力を環境的想像力と呼んだ。またディスコースとそのディスコースが表象する場所との関係の分析を目的とする研究分野の構築に手携わり、その分野は環境汚染の深刻化という時代の要請もあり、エコクリティシズムと呼ばれる学際的な研究領域として注目を集めた。

21世紀に入ると、テロ、戦争そして人災による環境破壊や放射能汚染の不安から、「汚染の言説」(toxic discourse) とよばれるディスコース分析が注目を集めた。アカデミアは、このディスコースをその社会的位置づけの重要性から文学の一形式として研究対象化する一方で、文学にとどまらず映画、音楽、コミックなどポップカルチャーのより多様な表象活動からもそのディスコースを発展的に拾い始めている。

そうした中で、オバマ大統領(当時、以下「オバマ」と記す)がプラハ、そして広島を訪れて行った演説の趣旨である「核なき平和」実現のために示唆した「終わりなき物語」という概念に着目した。すなわち原爆の記憶を風化させず、被爆者の物語を語り継ぐという決意表明に、語り部の死による被爆者の物語の断絶を回避する修辭的戦略としての読みの可能性を見出したことが、本研究の背景にある。

## 2. 研究の目的

被曝の表象を「汚染の言説」として分析する試みが本研究の目的である。具体的には、文学やジャーナリズム、映画、音楽、コミックなどポップカルチャーのディスコース分析を通じて、汚染や被曝について語られてきた「汚染の言説」の言語的構造とその特徴、社会で果たしてきた役割、オバマが示唆した「終わりなき物語」の創造への関わり方を明らかにすることを目指した。具体的な目的として、以下の点に焦点を当てている。(1) 環境汚染の拡大とともに形成されてきた「汚染の言説」のあり方を分析する。(2) この汚染の実態に向き合う「除染の言説」がその萌芽として認められることを確認する。(3) 「汚染の言説」が汚染について物語るその一方で、汚染がもたらした実態の解決を示唆する文体的構造を「除染の言説」と呼び、この文体的特徴が一つの修辭的戦略として機能してきた歴史を明らかにする。以上が研究の目的として掲げた内容である。

## 3. 研究の方法

まず「汚染の言説」の分析対象となる第一次資料の選定作業を行った。合わせて批評理論、とくにエコクリティシズム関連の書籍、「汚染の言説」に関連する文献の収集に努め、最新の研究動向を確認した。これにより、最近のエコクリティシズムの展開状況を把握するとともに、批評理論全体におけるエコクリティシズムの位置づけや「汚染の言説」の重要性についても批判的に考察した。また、本研究の方向性を検証するために以下の3点を実施した：

(1) エコクリティシズム関連の国際シンポジウムや国際学会に応募し、研究経過を発表する場を確保した。これにより、海外の研究者たちからのフィードバックを得ることで、他の学者による研究発表や講演を聴く機会を通じて、エコクリティシズムを専門とする学者との交流を深め、議論を展開した。

(2) 学内で開始した「環境人文学研究会」という研究プロジェクトを活用し、定期的に研究状況の報告を行った。この中で、異なる分野の参加者からの指摘を参考にし、仮説として「汚染の言説」が「除染の言説」の萌芽を内包する可能性を検証し、またその類型化とその分類に努めた。

(3) 研究経過を関連学会誌に投稿することで、随時研究の方向性を確認した。

## 4. 研究成果

以下、年度ごとに行った研究の成果について報告する。

平成29年度(2017)の研究では、「汚染の言説」の言語的構造とその特徴、社会で果たしてきた役割、オバマの示唆した「終わりなき物語」創造への関わり方について、特に、アメリカのエコフェミニスト、テリー・テンペスト・ウィリアムスの近年の作品群から『女性が鳥だった頃』(When Women were Birds, 2012)をディスコース分析することで考察した。またネバダ州での核実験による汚染の影響で癌に苦しむ自身の一族の実話を克明に描いた『鳥と砂漠と湖と』(Refuge, 1991)の成功により、「科学論文」としてではなく、ナラティブによって環境汚染の実態を記述する「汚染の言説」の類型として、ウィリアムスの作品群が頻りに引用されていることを確認した。これらの作品は、オバマの「核なき世界」という地球レベルでの環境保護を目指す修辭的戦略を補完する上で、市民レベルや地域レベルで汚染の実態を問いかけるナラティブと同時代性を持つディスコースとして意義を持つことが示された。この研究成果は、米国で行われた文学・環境学会国際シンポジウムで発表し、研究者たちからのフィードバックを得る機会を持った。

当該年度に得られた収穫は、ナラティブを、それが語られる社会や環境という場所のパスペクティブから観察することの意義を確認できたことにある。それは、人とモノ、文明と自然を二項対立としてではなく、それらの相互関係から把握する試みにおいてである。この迂回路を經由して、個人の語るディスコースを環境的側面から修正されたナラティブとして、客観性に理解する可能性が開かれた。今回取り上げた「汚染の言説」をめぐるナラティブは、おもに環境的側面において、文学の拡大する可変領域の一部として認識されうる。風景や時代性は、行為体の一つの類型として前景化される。当該年度の研究は、人間という行為体が、風景や時代性に対して浸透性をもつのではなく、風景や時代性自体が一種の行為体であるという反対方向の考え方を探求する知のあり方を模索するきっかけとなった。

平成30年度(2018)の研究では、前年度の研究で注目した要素である「汚染や被爆について語られてきた「汚染の言説」の言語的特徴、それが社会で果たしてきた役割、オバマが「広島スピーチ」で示唆した「終わりなき物語」の創造への関わり方について焦点を当てた。具体的には、テリー・テンペスト・ウィリアムスの近年の作品群から『大地の時間』(The Hour of Land, 2016)に着目し、日本語への翻訳作業とディスコース分析の2つのアプローチを通じて考察した。

当該年度の研究成果として、『大地の時間』の分析中に会った特定の概念によって、「汚染の言説」が持つ時限的な制約を解決する可能性が見出された。ここでいう「時限的な制約」とは、例えば広島では被爆体験を語る語り部たちの多くがすでに病気などでこの世を去り、また残された語り部たちも高齢化により次世代に被爆体験を伝えることが物理的に難しくなっている現状を指す。『大地の時間』の「ゲティスバーグ国立軍事公園」の章で頻繁に登場する“reenactor”という言葉は、「汚染の言説」が抱えるこの「時限的な制約」という課題を補完する可能性を秘めている。なぜなら、作品中の“reenactor”は、歴史上の出来事をその時その時間、その場所に居合わせた歴史上の人物に成り代わって再現する役割を果たしているからだ。上記の成果について、台湾で開催された文学・環境学会国際シンポジウムで発表し、研究者たちから有益なフィードバックを得ることができた。

令和1年度(2019)の研究では、前年度に注目した要素である、ウィリアムスの『大地の時間』での“reenactor”という概念が、歴史上の出来事をその時間と場所に居合わせた歴史上の人物に成り代わって再現する行為体を指していること、この概念/行為体がそれゆえ、「汚染の言説」が抱える「時限的な制約」という課題を補完する可能性を持っていることに焦点を当てた。2点について、当該年度は、「歴史的再現」(=historical reenactment)という行為と「歴史的再現の行為体」(=historical reenactor)との関係性から考察を試みた。具体的には歴史学の分野で行われている「歴史的再現」とその「再現者の行為」についての再評価のあり方を「汚染の言説」のディスコース分析に援用することを試みた。この研究では、歴史を「再現」する行為が歴史学の成果を社会に接続する上で有効であるという考えを、歴史の範疇を超えた様々なディスコースに普遍的に適用できることを見出した。

さらにこの点を踏まえて、「汚染の言説」として取り上げた様々なディスコース形態について考察した。具体的にはオバマの「核なき世界」と「広島スピーチ」、ウィリアムスの『大地の時間』、そして、この史代のマンガ『夕凧の街 桜の国』を概観することで、歴史的再現とその再現の行為体という関係を、二つの可能性、すなわち再現の行為体を、人間から環境に拡張することができる可能性と、詩的再現とその再現の行為体との関係がどのように発展するかを見出した。

また学際的研究が盛んなスタンフォード大学の客員研究員に応募し、招聘される機会を得た。そこで様々な分野の研究者と当該研究についての意見交換を重ね、有意義な知見を得ることができた。

令和2年度(2020)は新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、学会活動への参加が制限されたため、研究の進捗状況を検証する機会が制約された。そうした状況の中で、当該年度では特に詩的再現に注目し、再現の行為体を人間から環境に拡張することの有効性と問題点を考察した。帰国後の9月以降、国内では、『大地の時間』の考察結果を「記憶を語り継ぐための『一般的再現者』」(『日常の中の聖性』教友社、2021年3月20日発行の第3章に収録)として上梓した。国外では、前年度までの成果を発展させ、研究書の発行で国際的に著名な出版社であるラウトリッジからの出版に共同編集者および執筆者として参画する機会を得た。

令和3年度(2021)の研究では、これまで行ってきた被爆の表象を「汚染の言説」として分析する試みが、2018年に台湾師範大学で行われた「東アジアの戦争、平和そして環境」をテーマにした国際シンポジウムに採択されたことで具体化し、このテーマに関心を持った世界的学術出版大手であるラウトリッジが発行する論集の最新刊 *Mushroom Clouds: Ecocritical Approaches to Militarization and the Environment in East Asia* (2021)へと展開した。この出版は、環境人文学が、環境そのものの表象から、人間を含めた生態系の破壊という戦争の爪痕と、平和の構築という発展的なテーマを扱うことに対する、欧米のアカデミアの関心の高さとその学術的独自性への評価を示唆するものである。

韓国及び台湾の研究者と協力して同書の編集を担当した。また執筆を担当した章ではこれまで取り組んできた、この史代の原爆マンガ『夕凧の街 桜の国』とオバマの「広島スピーチ」の分析のこれまでの成果をまとめ上げた。ウィリアムスの被爆体験と家族の歴史を「再現」する語りを参考に、本研究ではこれまで論じられてきた歴史をめぐる表象に関する「歴史的再現」が二つの修辭的ナラティブによってどのようにリクリエイト(再創造)される可能性があるのかに

ついて詳しく説明した。一つは、マンガ的描写を通じて主人公のセリフが語られる環境を前景化するナラティブであり、もう一つは戦勝国の論理を避け、被曝した語り部の声なき声を再現することで、共感と連帯を喚起し「核なき平和」という希望を共有することを目指すナラティブである。

また7月10日に行われた米国ソロー学会の発表“Reenacting Thoreau in the Writings of Terry Tempest Williams”では、19世紀に自ら牢獄に入って奴隷制に反対したアメリカの思想家ソローの「市民の良心的不服従」という行動がアメリカの歴史上繰り返し「再現」されてきたことを紹介し、ウィリアムスの歴史的再現にもその影響があることを指摘した。さらに10月1日に行われた日本ソロー学会の発表「テリー・テンペスト・ウィリアムスの『大地の時間』にみる国立公園とリエンアクトメント」では、アメリカにおいて「市民の良心的不服従」が繰り返し再現される背景に、国立公園などで役者が歴史上の人物を演じることが風物詩として受け継がれてきた文化があったことを明らかにした。さらに12月に行われた韓国環境・文学学会シンポジウム「国際環境人文学研究動向と展望」ではこの読みの可能性について、ラウンドテーブルで発表し、ディスカッサントから有益なレビューを得る機会を得た。

令和4年度(2022)の国内での研究活動としてまず、前年度に白百合女子大学大学院で実施した環境人文学に関するオムニバス授業の成果を発展させた研究論集『パンデミックの言説』(弘学社)を12月に刊行した。同論集において責任編集を務めると同時に論文を寄稿し、新型コロナウイルスによるパンデミックが、地質年代区分上、人類の生命活動の痕跡を含めざるを得ないとする人新世に特有のものであることを示し、映画の新しいジャンルとして注目を集めるパンデミック映画にその類型が散見されることを報告した。翌年2月には『ヘンリー・ソロー研究論集』に前年度の研究発表をより具体化した「ウィリアムスの国立公園の描写に見るソローのダブル・ヴィジョンとリエンアクトメント」と題した論文が掲載(査読論文)された。この中で、アメリカにおける、語りによる歴史の「再現」の類型を19世紀の思想家ソローの作品に遡及して論じた。最後に、本研究の最終年度のまとめと今後の展望を占う研究活動として国際会議での研究発表と、ワークショップへの参加を紹介したい。カリフォルニア州ドミニカン大学のワークショップに参加、福島原発事故に関連した詩の創作や英訳を手掛けるハリブスキ教授の元、創作による歴史の「再現」の可能性について議論した。カリフォルニア大学アーヴァイン校で国際交流基金と共催された国際会議、“Earth, Kin, Care Conference”の発表パネルに応募し採択された。この発表では「歴史的再現」において、「加害者」「被害者」の二項対立を避ける語りの在り方として、言語構造上の一つの「態」として知られる「中動態」(middle voice)という概念の適用により、被曝のディスコースを語り継ぐ可能性を見出したことを報告した。

今後の研究課題としては、この「中動態」という概念を用いて、戦争に加担した側の人間であるという加害者意識(能動的側面)と戦争の犠牲者であるという被害者意識(受動的側面)による葛藤を克服するための、いわば中動態的な「詩的」ナラティブの可能性を探求し、目撃者以外が放射能汚染の記憶を語ることの合理性を検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩政伸治	4. 巻 47-48
2. 論文標題 ウィリアムスの国立公園の描写に見るソロー のダブル・ヴィジョンとリエンクトメント	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ヘンリー・ソロー研究論集	6. 最初と最後の頁 77-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 9件）

1. 発表者名 Shinji Iwamasa
2. 発表標題 Seeking the Roles of Writers Who Have Seen Too Much: Tomiko Inui, Fumiyo Kouno and Erika Kobayashi ”
3. 学会等名 Earth, Kin, Care Conference（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Shinji Iwamasa, Greta Gaard, Serena Chou, Chen Hong, Simon Estok
2. 発表標題 Roundtable: Trends and Prospects of International Environmental Humanities Research
3. 学会等名 2021 ASLE-Korea 20th Anniversary International Conference（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shinji Iwamasa
2. 発表標題 Reenacting Thoreau in the Writings of Terry Tempest Williams
3. 学会等名 The Thoreau Society（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩政伸治
2. 発表標題 テリー・テンペスト・ウィリアムスの『大地の時間』にみる国立公園とリエンアクトメント
3. 学会等名 日本ソロー学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩政伸治
2. 発表標題 国際環境人文学研究動向と展望
3. 学会等名 韓国文学・環境学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shinji Iwamasa (guest speaker)
2. 発表標題 The Global Thoreau Community: A Conversation
3. 学会等名 US Thoreau Society（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩政伸治
2. 発表標題 未来と過去を繋ぐもの ウィリアムス、オバマ、こうの史代にみる被爆の言説
3. 学会等名 キリスト教文化研究所「日常の中の聖性」第7回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shinji Iwamasa
2. 発表標題 A Study of Toxic Discourse in Obama's Hiroshima Speech, the Works of Terry Tempest Williams and the Works of Kono Fumiyo
3. 学会等名 The 6th International Symposium on Literature and Environment in East Asia (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩政伸治
2. 発表標題 惑星の神話という弁証法
3. 学会等名 石川県西田幾多郎記念哲学館夏期哲学講座
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shinji Iwamasa
2. 発表標題 Deciphering the Secret Languages in the Writings of Terry Tempest Williams
3. 学会等名 The Association for the Study of Literature and Environment (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shinji Iwamasa
2. 発表標題 A Lineage of the Secret Language in the Writings of Thoreau and Williams
3. 学会等名 The Thoreau Society (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shinji Iwamasa
2. 発表標題 A Study of Toxic Discourse hinted by the Mythification of Narratives in Obama's Hiroshima Speech
3. 学会等名 The American Studies Association of Korea (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 岩政伸治 他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 弘文社	5. 総ページ数 202
3. 書名 パンデミックの言説	

1. 著者名 釘宮明美 岩政伸治 他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 教友社	5. 総ページ数 205
3. 書名 日常の中の聖性	

1. 著者名 Simon C. Estok (Editor), Iping Liang (Editor), Shinji Iwamasa (Editor)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 212
3. 書名 Mushroom Clouds: Ecocritical Approaches to Militarization and the Environment in East Asia (Routledge Studies in World Literatures and the Environment)	



1. 著者名 テリー・テンペスト・ウィリアムス著、伊藤詔子、岩政伸治、佐藤光重訳	4. 発行年 2019年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 408
3. 書名 大地の時間 アメリカの国立公園、わが心の地形図	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>スタンフォード大学人文科学大学院東アジア研究センタービジティングスカラーホームページ（2020年度）  <a href="https://ceas.stanford.edu/people/visiting-scholars">https://ceas.stanford.edu/people/visiting-scholars</a> (Accessed August 31, 2020)</p>
---

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------